

社会貢献活動における教育効果についての研究 ～実習の開始前と開始後における学生意識の変化～

東尾（金井）淳子^{*1}・市山 雅美^{*2}・湯浅 将英^{*3}・水谷 光^{*4}

Educational benefits of the "Social Contribution Program",
Changes in student social consciousness at Shonan Institute of Technology

Atsuko HIGASHIO KANAI^{*1}, Masami ICHIYAMA^{*2}, Masahide YUASA^{*3}, Hikaru MIZUTANI^{*4}

Abstract:

This paper reports on changes in student social consciousness through the "Social Contribution Program", which takes place over a fifteen-hour timeframe throughout a semester. The data was collected through a paper questionnaire during at the start and the midway points and analyzed for changes in social consciousness, especially in the field of motivation. In contrast to the image of enthusiastic students filled with a spirit of volunteering, the main question of this research was to find the extent to which students joined the program out of less altruistic reasons, for example to increase credit. In addition, the aim was to ascertain how the program could help students to make meaning out of the experience through integrating with other volunteers for a common goal. Initially, the statistics indicate that many students reported that their primary motivation was for credit, but interestingly, by the mid-way point, their responses indicate more socially driven motivations. This change in mindset alone clearly demonstrates that this kind of holistic education provided by the program has a profound effect on the students.

KEY WORDS: social contribution education, educational benefits, learning effectiveness, student social consciousness, active learning, service learning, self-reflection, changing mind shift, questionnaires

要旨:

本研究は、湘南工科大学におけるサービスマニエール系科目「社会貢献活動」の履修学生に対し、活動15時間程度を終えた中間期研修会の場で、「開始前」と「15時間後」時点での意識の変化を問うアンケート調査を実施し、その回答結果に実習先からの各学生に対する評価などの客観要素を付加した上で、データ分析・考察を行ったものである。データ分析に際しては、特に学生の履修動機が「単位目的」であるかどうかという点に着目しクロス集計を行った。その結果、履修動機について「単位が欲しいから」といった「単位目的」をあげている学生も、活動を始めると活動先に対する興味・理解度が増加し、やる気（＝熱意）も増加するという層が存在するということが分かった。こうした開始前の時点では動機不純で望ましい履修態度とは言えなかった者が、活動開始によって良い方向に変わるといふ現象は、これまで教員たちの間では経験則として言われていた。今回、その現象を数値的に確認することが出来た。これは、社会貢献活動の持つ一つの大きな教育効果であると言える。

キーワード: サービスラーニング 教育効果 学習効果 学生意識 実習生 自己評価 意識変化 質問紙調査

1. はじめに

湘南工科大学では1996年以来、社会貢献活動実践型の授業科目を実施している。活動はサービスマニエールの形を取り、学生は1つの実習テーマに基づき約50時間の学外活動を行い、活動を通じてさまざまな学びや気づきを獲得していく。この試みは、当初ボランティア論の講義内での実習としてスタートしたものが、実習時間及び内容をより拡充するため独立、別科目枠となり、現在はフィールド分野での

^{*1}湘南工科大学工学部 ボランティア論非常勤講師、
社会貢献活動支援室テクニカルアドバイザー

^{*2}湘南工科大 総合文化教育センター 准教授

^{*3}湘南工科大学工学コンピュータ応用学科 講師

^{*4}湘南工科大学工学総合デザイン学科 教授

単位認定科目「社会貢献活動1」「社会貢献活動2」となっている。社会貢献活動1で50時間の実習を行った後に、同じ実習先でより実習テーマについて理解を深めるために、社会貢献活動2として更に50時間の実習を行うことができ、それぞれ2単位ずつの単位取得が可能という体制である。

筆頭著者・東尾（金井）淳子は2015年4月に当学に着任し、社会貢献活動支援室のテクニカルアドバイザーとして学生と実習先とのコーディネーション業務、各種研修会の担当、学生指導にあたっている。

著者着任以降の2015年~2016年現在、毎年度前期・後期に社会貢献活動1では15名前後が新規実習登録を行い、前年度からの繰り越し人数を含め10数名が各学期ごとに修了し、その後、次学期以降に社会貢献活動2に進む者は1~2名程度である。

2016年現在、この社会貢献活動において実習テーマとして設定しているものは、約30種類あり、その一覧は以下に上げた通りである。また本社会貢献活動の履修と単位取得の流れについては附属資料として本論文の最後に添付した。

表1 実習テーマ一覧（2016年現在）

活動分野	テーマ名	団体名（実施団体）
一般教育	辻堂こども広場	辻堂こども広場
	放課後キッズクラブ	(公益財団法人) よこはまユース 放課後キッズクラブ
	辻堂のヤング☆スクエア	(公益財団法人) 藤沢市みらい創造財団 辻堂青少年会館
	はまぎん こども宇宙科学館サポート	SFG・NTT ファシリティーズ共同事業体
	海の子☆森の子クラブ	(一般社団法人) 地球の楽校
一般福祉	障がい者施設「まどか」サポート	(社会福祉法人) 創 ライフケアセンター「まどか」
	サポートセンター「径（みち）」	(社会福祉法人) 訪問の家 サポートセンター「径」
	障がい者入所施設「湘南あおぞら」サポート	(社会福祉法人) 藤沢育成会 知的障害者入所更生施設「湘南あおぞら」
	放課後等デイサービス サポート	(社会福祉法人) 光友会 太陽の家
	訪問の家「朋（とも）」活動サポート	(社会福祉法人) 訪問の家生活介護事業「朋」 または「朋第2」
	ぜんぎょう日中一時支援事業サポート	(社会福祉法人) 光友会 「日中一時支援事業所ぜんぎょう」
一般ユニバーサルスポーツ	車いすテニス大会サポート	神奈川県車いすテニス協会
	電動車椅子サッカー	電動車椅子サッカークラブ Yokohama Crackers
	太陽の家障がい者スポーツ	(社会福祉法人) 光友会 太陽の家「体育館」
一般環境・自然	二宮町葛川クリーンアップ	葛川をきれいにする会
	茅ヶ崎里山保全	茅ヶ崎里山公園倶楽部
	引地川の環境保護	川と海の環境を守る会
	辻堂海浜公園管理	(公益財団法人) 神奈川県公園協会 辻堂海浜公園管理事務所
	都市の森の保全活動	(公益財団法人) 日本野鳥の会 横浜自然観察の森
資源・エネルギーの地産地消を学ぶ	(特定非営利活動法人) いいだ自然エネルギーネット山法師	
一般社会	NPO支援センター事業サポート	(特定非営利活動法人) 藤沢市市民活動推進連絡会、および藤沢市市民活動推進センター
工科系情報	高齢者パソコン講座サポート「湘南なぎさ荘」「やすらぎ荘」	(社会福祉法人) 藤沢市社会福祉協議会 いきいきシニアセンター「湘南なぎさ荘」、および「やすらぎ荘」
工科系ものづくり	福祉ものづくり	湘南工科大学
	ユニバーサルカヌー体験会	(公益社団法人) かながわデザイン機構
工科系社会	<社会>とてあう映像プロジェクト	(特定非営利活動法人) 湘南市民メディアネットワーク
工科系教育	おもしろ科学たんけん工房学習支援	(特定非営利活動法人) おもしろ科学たんけん工房
	バスケットワークショップ	(合同会社) デジタルポケット

2. 研究背景と先行研究

湘南工科大学における社会貢献活動は、ただ単に50時間の学外実習を行えば良いというだけでなく、以下のような形で、学生に対する教育・指導の機会を設けている。

- ①授業ガイダンス（最初のガイダンス・仮登録）
- ②事前研修会（全体説明と諸注意・履修の本登録）
- ③実習テーマ別ガイダンス（実習先別の個別説明）
- ④中間期研修会（実習開始15時間後の研修会）
- ⑤報告会（実習全50時間終了後に行う成果発表会）

①～③までが実習開始前、④が実習中、⑤が実習終了後に行われる。①の授業ガイダンスは社会貢献活動に少しでも興味のある学生が聞きに来る説明会で登録も仮登録であり、実質的な教育指導が行われるのは②の事前研修会以降である。

つまり、実際には、開始前・実習中・実習後の3時点、計4回の接点のみで、この社会貢献活動という科目における教育効果をあげなくてはならない。むしろ、学生には「実習中何かあったら社会貢献活動支援室に相談に来ること」を徹底周知させているが、「何かあったら」とは言葉を返せば何も変事はなく順調に実習が進んでいる場合は相談には来ないということであり、実際、実習中に困ったことの相談はあっても、上手くいっていることを報告に来るケースはほとんどない。

社会貢献活動の教育効果、すなわち、多岐にわたる学生の学びについて、分析する試みは、長年続けられてきた。アンケート調査などの量的分析とともに、報告書などの学生の記録を用いた、質的分析も様々な形で行われてきた。田坂さつきほか「体験による気づきから学びを引き出す「サービラーニング」—工科系の特徴を生かした社会貢献活動体験型授業科目—¹」では、実習生の報告書などの記述について、「工学・科学的な記述」、「活動に直接関連する成果」、「活動から繋がる実り」、「知識、忍耐力を得た、コミュニケーションの大切さを知った等」、「自分の将来と関連する記述」に分類を試みている。

学生の学びの分類と体系化は、村山拓「体験学習のリフレクションに関する考察 中間期レポート・報告書の記述の分析」で精緻化されていった²。同論文では、記述内容について、実践共同体への参加、知識・技術の習得、技術活用の実践、行為の中での省察、技術者倫理、将来の展望や職業に関することの6項目と、記述の際にどのような人や出来事に言及しているかという「リソース」の両面で、記述の分類整理を行っている。

学生の学びの深まりの研究の例として、市山雅美

「実習生のレポートから、実習生の気づきを読み解く「福祉ものづくり」を例に」³が挙げられる。同研究では、中間期レポートと報告書の分析を行った。分析には、可能な限りすべての記述に対し何らかのコードを付与し、可能な限り共通するコードに整理し、コードをカテゴリごとに分類した。その際、質的データ分析ソフトウェア「MAXQDA」を用いた。「利用者に関する視点」のカテゴリについていえば、中間期では利用者の視点で考えることができたという記述（コード「利用者の視点」）が見られるのとどまったのが、最終報告書では、さらに、利用者の視点で考えるためには、利用者の声を聴いたり、利用者の実態を見る必要があるという記述（コード「利用者を理解する」）や、利用者と自分の認識の違いに気づいたという記述（コード「利用者」と自分の認識の違い）が見られるなど、学びの深まりを分析できた。

同様の研究はその後、十分に継続されてこなかった。その理由の一つには、実習生が自分の経験について十分に言語化できていないことが挙げられるだろう。それについては、同論文でも「利用者の視点で考える」ことの具体的な内容については、記述の濃淡が見られる。ただし、記述が「相手の立場に立って物事を考える」ことを学んだというだけであっても、その具体的内容が伴わないということだけでなく、文章力等の制約で言語化が不十分だったか、ゆっくり考えて書く時間がなかったなどの理由で、文章として表現されなかっただけだと考えられる」と論じている。

ただ、文章として表現されない部分でも、丹念にインタビューを行うと、学生の経験が克明に浮かび上がる。東宏乃「ワークショップでひろがる学びのプロセス—実習科目「社会貢献活動」を事例として—⁴」では、社会貢献活動1と2を通じた、学生の成長の過程を、学生の回想の聞き取りを行うことで、浮かび上がらせている。しかし、顕著な成長の見られた学生の事例研究という側面は免れない。

3. 本研究の目的

先にみた研究背景および先行研究の問題点を受け、本研究ではまず数量化しやすい選択式アンケート調査票を開発することにした。その際、質問項目は以下の理由から学生の意識の変化を問うものを中心とした。そもそもこの社会貢献活動というプログラムは、学生を集めて調査を行う機会が前述の4回と限られている。その中でも実習開始後15時間程度の時期に受講する中間期研修会は「これまでの前半実習

を振り返り」「問題点を認識し」「今度の活動への目標を立てる」という振り返り作業のために設定されている。実際にはこの中間期研修会に漕ぎ着けることなく活動を止めてしまう学生も存在する。しかし逆に言えば中間期研修会に参加した者は後の活動もきちんと終えているケースが多い。また、この時点であれば、学生は実習開始直後のこともまだ記憶に新しく、同時に問題点も見えてきている頃だと判断される。更に、この研修会の目的である振り返りという作業において、添付のアンケート原票にみられるような、実習先活動内容に対する知識の有無や、活動に対する熱意の有無などを問うていくことは、自己認識を深め、「振り返り」という作業そのものに寄与するであろう。そのため、本研究で用いた調査票は、この中間期研修会で行うアンケート調査の形式をとりつつ、それに回答していくことで自分自身と実習活動について見つめ直し、セルフチェックが出来るようなものを目指した¹⁾。

本研究は、この調査票を用い、学生の家族構成や家族のボランティア経験などの基本属性項目を問うと同時に実習の開始前と開始後の自分の「実習先への興味」「実習先への理解・知識」「実習に対する熱意」の変化を問うている。

また、本研究は、根底に社会貢献活動の履修理由が、実習そのものに対するモチベーションや実習態度、ひいては実習先からの最終評価に影響を及ぼしているのではないかという研究仮説を置いている。社会貢献活動はその成り立ちがボランティア論の実習部分が独立したということからも分かるように、本来、ボランティアな精神、すなわち自分の内部から出る自主的な思いに基づく活動でなくてはならない。しかし、実際には近年「単位が足りないから」「選択必修科目でインターンシップか、社会貢献活動か、プロジェクト実習かを選んで受講しないとイケないから」といった単位目的での履修が目立つ。また、通常、1学期間に履修できる単位上限はCAP制²⁾に基づき24単位に制限されているが、この社会貢献活動による単位認定はその履修上限に含まれないという規定がある。そのため、そこに着目し「進級するのに単位上限とっても、あと2単位どうしても足りない。社会貢献活動は単位上限に含まれないから、今学期中に履修して50時間一気に実習をやり、進級に間に合うように単位が欲しい」そう言って社会貢献活動支援室に駆け込んでくる学生が年間、何人もいる。進級に関与することであるため、そういう学生は特に後期に多い。こうした、ボランティア精神の原義にもとる「駆け込み寺」的な社会貢献活動システムの利用は常々問題であると感じている。しか

し、選択必修の関係など大学全体の履修システムに関わる部分でもあるので「駆け込み需要お断り」と門前払いにするわけにもいかない。今回の調査では、この履修目的が「単位目的」であるかも問うている。また、正規のアンケート調査の回答では直接浮かび上がらない、隠れた「単位目的」群もいくつかの手法で浮かび上がらせる作業を行った³⁾。これは事前のガイダンス時に今学期中の修了を希望するかどうかを口頭にて問う聞きとり調査に基づいている。その際、「本プログラムは概ね1年をかけて50時間の実習を行うという目安がある中、どうして半年で修了希望なのか」という理由も聞き取っている。逼迫した学生は履修したい一心でこの時ばかりは本心を語る人が多い。こうしたアンケートによって得られた回答及び事前聞き取り調査から得られた回答に基づき、履修目的に「単位取得」をあげている学生を本論では便宜的に「単位目的群」と呼称し、それ以外の履修動機による学生たちを「単位目的以外の群」と呼称する。

但し、話は逆転するように思うかもしれないが、筆者の学生対応の経験上、こうした単位目的群の学生も一部の場合、否、かなりの場合、社会貢献活動の実習に出ることによって良い方向に変わっていかけていくことが多いと感じる。実際、最終的な報告書や報告会では「最初は単位が欲しかっただけだったが、やってみたらとても面白かった」といった文言を多く見かける。それは、大学側が提供している実習テーマが面白いものが多い故ということなのかも知れない。あるいは社会に出て実際に人の役に立っているという実感自体が学生の意識や行動を根本から変えていくのかも知れない。もし後者の原理で学生の意識が変化したならば、この社会貢献活動という取り組みの教育的な成功の証の一つになるだろう。

また、当然のことながら、最初から社会貢献活動に対して高い意識を持つ学生たちも多く存在する。それらの高モチベーション群の学生は、教員の経験則から予想すると、高い意識を持っているが故に自己認識も厳しく、自己評価を低くつけるのではないかという仮説もある。そこで、このアンケート調査の回答結果データベースに実習終了後に実習先から送付されてくる「評価書」で実習中期の期間につけられた「評価」を加えた分析を行ってみようと考えている。

本研究では、こうした中間期研修会におけるアンケート調査及び事前研修会での聞き取り調査などをもとに、学生の意識変化、態度変化を分析し、その結果を社会貢献活動という教育プログラムに還元していくことを目的とする。

4. アンケート調査の実施

本アンケート調査は2015年度前期、2015年度後期、2016年度前期の中間期研修会に充てられた90分の授業時間内の前半15分を用いて回答を得たものが主である。また一部に後述の理由で最終報告会時に出席票を兼ねて回答させ回収した票もある。

調査対象は、基本的に湘南工科大学の社会貢献活動に登録し、15時間程度の実習を行い、今後も実習継続予定である学生たちで、その内訳などは次章調査結果（単純集計）にある通りである。但し、調査対象の中には、著者の着任以前に、前任者のもとで中間期研修会を受講した者もいる。そういう者は最終報告会報告会の折に、実習15時間程度を終えた時点を回想しながら回答を求めた。

調査用紙は本論文最終頁に添付の通りである。

5. 調査結果(単純集計)

回収票：47票（※2016年9月25日現在）

（内、中間期研修会での回収票36票、報告会での回収票11票）

男女比内訳：男性42名 女性5名

表2 実習生の学科別内訳⁴⁾

学科名	人数
コンピュータ応用学科	6
機械工学科	5
情報工学科	6
人間環境学科	24
総合デザイン学科・コンピュータデザイン学科	4
電気電子工学科	2
総計	47

表3 実習生の学年別内訳

学年(回答当時)	人数
1年生	4
2年生	6
3年生	31
4年生	6
総計	47

表4 実習テーマ別人数

実習テーマ名	人数
辻堂海浜公園整備	10
茅ヶ崎里山保全	9
辻堂のヤング☆スクエア	7
資源エネルギーの地産地消を学ぶ	4
電動車椅子サッカー	3
福祉ものづくり	3
車いすテニス大会サポート	3
引地川の環境保護	2
放課後キッズクラブ	2
二宮町葛川クリーンアップ	2
はまぎん こども宇宙科学館サポート	1
バスケットワークショップ	1

表5 志望動機（1番目）

志望動機	人数
1 ボランティアに興味があったから	22
2 人とふれあいたかったから	7
3 自分の工学系知識を生かした社会貢献を試みたかったから	3
4 家族や友人・知人など、身近にボランティア経験のある人がいたから	0
5 単位のため	14
6 その他(理由を自由記述)	1(※)
総計	47

※その他の理由としては「実際に体験してみたかったから」があがっている。

表6 志望動機（2番目）

志望動機	人数
1 ボランティアに興味があったから	11
2 人とふれあいたかったから	20
3 自分の工学系知識を生かした社会貢献を試みたかったから	4
4 家族や友人・知人など、身近にボランティア経験のある人がいたから	1
5 単位のため	7
6 その他(理由を自由記述)	4(※)
総計	47

※その他の理由としては「もともと清掃活動が好きだったから」「選択必修科目の関係⁵⁾」「友達と出来るから」「就活で書くことを作りたいから」があがっている。

表7 社会貢献活動経験の就活への利用

就活で社会貢献活動の話をするか？	人数
1 する	39
2 しない	5
未定	3
総計	47

活動15時間後の活動先への興味増減

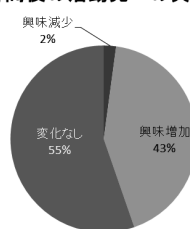


図1 活動15時間後の活動先への興味増減⁶⁾

活動15時間後の活動先への理解度の増減

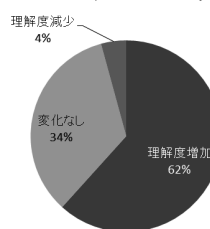


図2 活動15時間後の活動先への理解度の増減⁷⁾

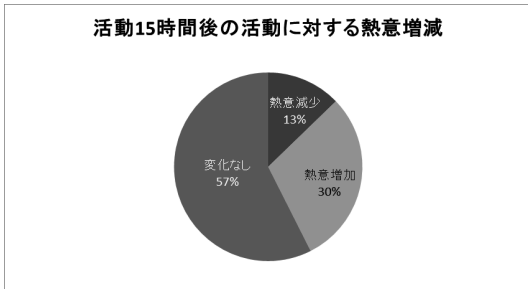


図 3 活動 15 時間後の活動に対する熱意の増減⁸⁾

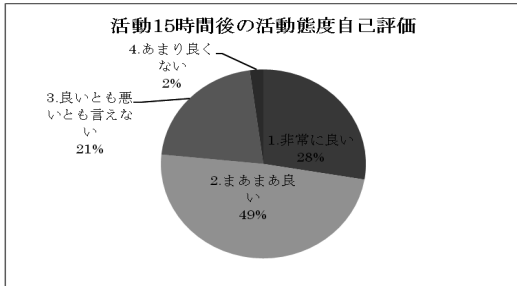


図 4 活動 15 時間後の活動態度自己評価

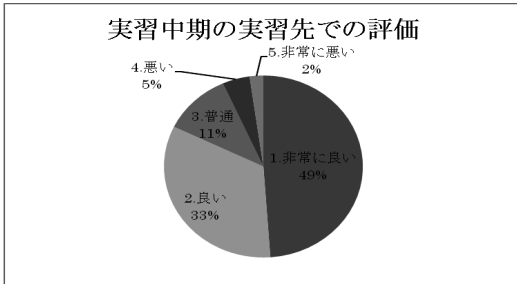


図 5 実習中期時点の実習先での評価

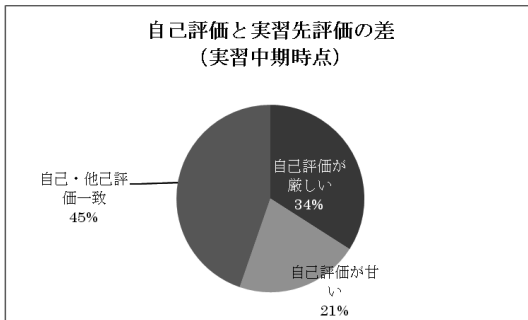


図 6 実習中期時点の自己評価と実習先評価の差

6. 調査結果(クロス集計)

前述の研究目的部分で想定した「履修動機が単位目的であるかどうかによって活動への取り組み方が違うのではないか」という仮定のもと、履修動機が単位目的である群と単位目的以外を答えている群に分け、いくつかのクロス集計を行った。

また、もう一つの仮定である自己に厳しい群の動向についても、実習中間時点での自己評価と実習先との評価の差（自己評価が厳しい・甘い・自己/他己評価が一致）とモチベーションの高低（5～1）に着目し、いくつかのクロス集計を行った。

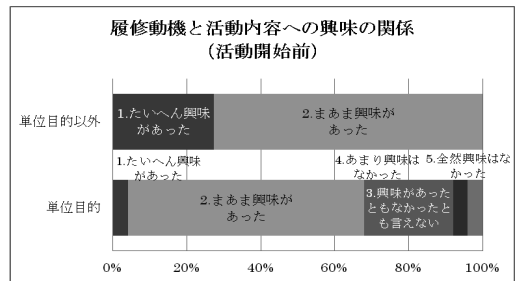


図 7 履修動機と活動内容への興味の関係 (活動開始前)

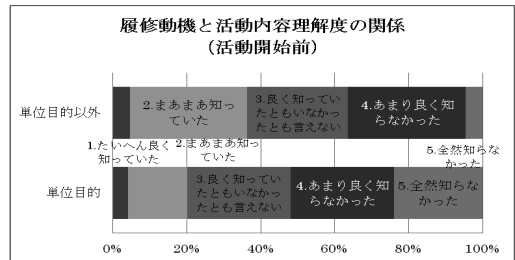


図 8 履修動機と活動内容の理解度の関係 (活動開始前)

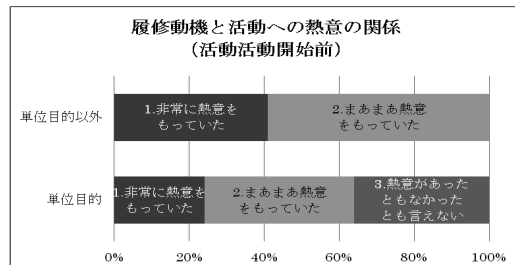


図 9 履修動機と活動への熱意の関係 (活動開始前)

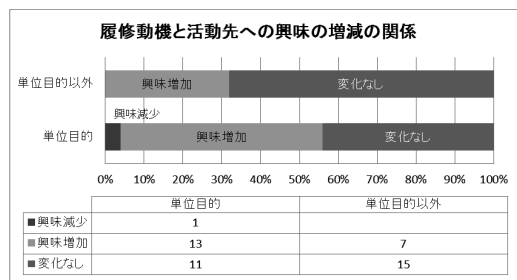


図 10 履修動機と活動先への興味の増減（活動開始前と 15 時間経過時の意識変化）

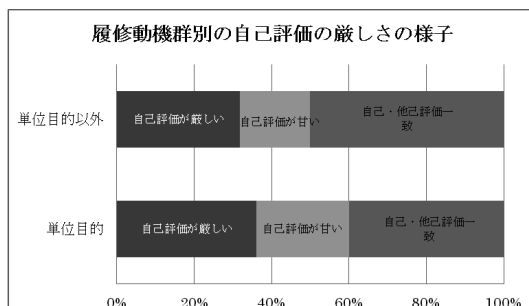


図 13 履修動機群別の自己評価の厳しさの様子（実習中期時点）

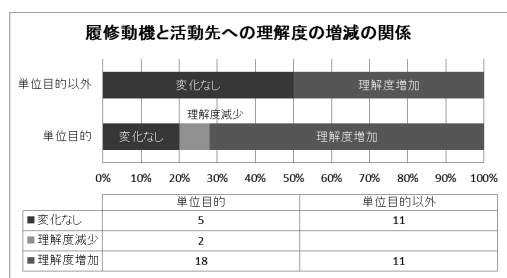


図 11 履修動機と活動先への理解度の増減（活動開始前と 15 時間経過時の意識変化）

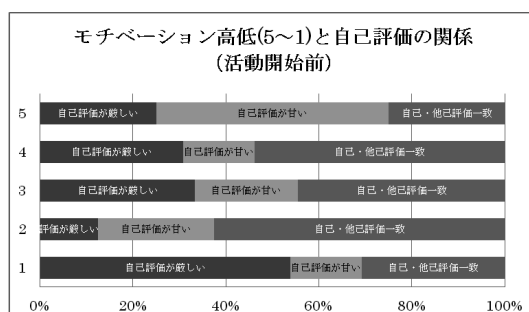


図 14 モチベーションの高低⁹⁾と自己評価の関係（活動開始前）

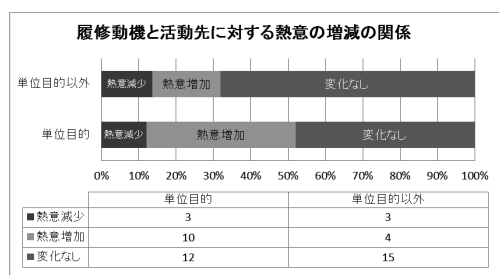


図 12 履修動機と活動に対する熱意の増減⁸⁾（活動開始前と 15 時間経過時の意識変化）

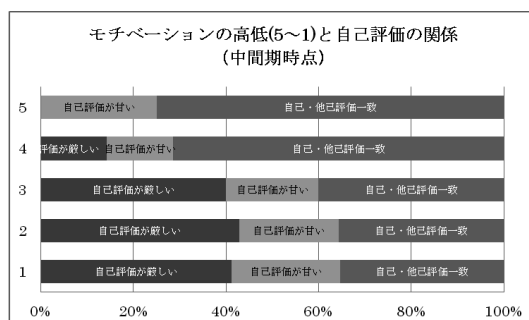


図 14 モチベーションの高低¹⁰⁾と自己評価の関係（中間期時点）

7. 調査結果への考察

調査結果への考察は、以下①から⑧にまとめられる通りである。

①志望動機は「ボランティアに興味があったから」が最多

表5の志望動機(1番目)にて、一番多かった志望動機は「ボランティアに興味があったから」22票であり、次いで「単位のため」の14票、「人とふれあいたかったから」7票となっている。表6の志望動機(2番目)にて、一番多かった志望動機は「人とふれあいたかったから」20票、次いで「ボランティアに興味があったから」「ボランティアに興味があったから」11票、「単位のため」の7票という結果になっている。1番目の理由、2番目の理由共に、ここに上げた3つが志望動機の上位3つを占め、対して「自分の工学系知識を生かした社会貢献をしてみたかったから」は3~4票と少数、更には「家族や友人・知人など身近な人にボランティア経験のある人がいたから」についてはたった1票の回答と極少数派となっている。

「工学系知識を生かした社会貢献」は大学側が目指す教育目標の一つとして大きく掲げてはいるが、回答結果を鑑みるに学生の多くは「まだ自分は工学系知識には乏しく、それで社会貢献など出来ない」と考えているようである。また身近な人のボランティア経験から自分もボランティア活動を始めたという話はよく聞くように思うが、今回の調査ではそれを肯定する結果は得られなかった。

②実習テーマは自然環境保護系に集中

履修者の選択する実習テーマは表4に見られるように公園整備や川清掃などを筆頭とした自然環境保護系に集中している。上記①の工学知識を生かした社会貢献が少なかった理由の一つも、この自然の中で体を動かしてみたいという傾向故かも知れない。また、実習先選択理由を問う自由記述では自身のコミュニケーション能力の低さを挙げ人と接するよりは自然相手の方が良いとしている者も散見した。

③活動経験を「就職活動に活用したい」が大多数

表7の就職活動でこの社会貢献活動の経験を話すかどうかという設問については「する」が39票、「しない」が5票、「未定」が3票と、就活での積極活用を考えている者が大多数であることが分かる。これについては自由記述欄を設け、どのような話をするかも問うてみたが、実習の苦労譚や実習経験そのものを話すという回答が一番多かった。逆に話さないと答えた層の回答には「自分の志望する就職先とは関係ないと思うので」といった社会貢献活動の内容と就職先の分野の違いを書いている者が多かった。

教員の側の思いとしては、たとえ就職先の分野との関連がなくとも、本「社会貢献活動」は面接試験時の話題として自己アピールをしやすく、面接官の記憶にも残りやすいだろうと考える。しかし、実習生の多くを占める1~3年生は、まだ就職活動開始前であり、この自己アピールの重要性が実感出来ないのかも知れない。

④活動15時間後、興味・理解度・熱意は確実に増加

図1~3では回答者全員の活動15時間後の活動先への興味の増減、理解度の増減、熱意の増減をみている。図1の興味の増減では「変化なし」の回答が一番多く55%、次いで「興味増加」が43%、「興味減少」は2%であった。図2の理解度の増減では「理解度増加」が62%、「変化なし」が34%、「理解度減少」が4%であった。図3の熱意の増減では「変化なし」が57%、「熱意増加」が30%、「熱意減少」が13%であった。興味に「変化なし」が多い件については、今回の単純集計結果には載せていないが、活動開始前から「まあまあ興味があった」32票、「たいへん興味があった」7票と、初期段階から自分は実習先には興味があるという方向で答えている層がかなり存在する。つまり初期値が高い故に、そこから活動開始後に更に高い興味を持つようになる回答は少なかったのであろうと考察される。また、この興味、理解度、熱意の増減の中で「減少」方向への回答数に着目すると、前二者の興味・理解度において「減少」を答えたのは極少数であるが、熱意については「減少」を答えた者が13%存在する。つまり活動を開始後、実習先への興味や理解度は増していった場合でも、熱意は減少してしまったケースがあるということである。この熱意についての自由記述欄での回答を見ると何か失敗があった、実習先とのトラブルがあった等のネガティブな理由を上げている者は皆無であり、皆「実習は楽しい」「貢献できていると思う」といったことを書いている。以上から考えられる考察は、実習開始前は「たいへん熱意がある」と必要以上に意気込んでしまったが、その後活動開始後にはほどほどに肩の力が抜け、「まあまあ熱意がある」といった回答にシフトしたのではないかとということである。

⑤単位目的群は活動開始後、興味・理解度・熱意が好転

クロス集計の結果については、まず図7、8、9を見ると、活動開始前時点での一般的な傾向として、単位目的群は単位目的以外の群に比べ、活動先への興味は薄く、理解度も低く、熱意も低い傾向にあることが分かる。

ところが、図10~12にて、活動開始後15時間時点での意識との差分(意識状態を点数化し、その点

数の増減）をみると、逆に単位目的群は興味、理解度、熱意ともに増加したと答える者が多い。この好転現象は、当初の仮定で考えたように、単位目的群が活動を始めてみると案外活動自体が面白いということに気づいた故であると考えられる。こうした現象を見ると、やはり本社会貢献活動は、履修動機が単位目的である等、初期段階ではあまり良い履修態度とは言えない学生に対する教育効果が確かにあるのだと実感することが出来る。

逆に単位目的以外を答えている群は初期値として実習先に「たいへん興味がある」、実習先知識も事前に団体HPなどをチェックして「よく知っている」、実習への当初の意気込みも「たいへん熱意がある」と答えている者が多いため、そこからの興味、理解度、熱意の増加・変化はないという現象が起きているだろうと考察される。

⑥全体傾向として「自己評価と他己評価が一致」が多い

次に、2つ目の仮定として置いた「高モチベーションである人は自己への評価も厳しいのではないか」という問題については以下のように考察する。まず単純集計の方で全体回答を見ると、図6にて自己評価が厳しい群は34%、甘い群は21%、自己評価と他己評価（この場合は実習先からの評価）が一致する群が45%という結果になっている。全体的に「自分を正しく把握している」層が多いという結果である。

⑦単位目的群は自己評価で「厳しい」と「甘い」が二極化

自己評価をモチベーションの高低（5～1）別に図13および14をみると、どちらの場合も、低モチベーション層であるモチベーション1や2においてむしろ自己評価が厳しいという結果が出ている。また、この傾向は活動開始することによって改善されるという問題でもないということも伺える。

この現象については、図13にみられる結果が一つの理由を示していると考えられる。図13は履修動機別の自己評価の厳しさの様相を示しているものであるが、これによると単位目的群の方が単位目的以外の群よりもむしろ自己評価が厳しいという傾向にある。但し、自己評価が甘い人数割合は確かに単位目的群の方が多きことも観察される。つまり、社会貢献活動を単位目的で履修したという学生たちは、自分に厳しい者と自分に甘い者の二極化をしているということなのである。

⑧単位目的以外の群は自己把握が正しく出来ている

また、図13より、単位目的以外の群は自己評価と他己評価が一致している人数割合が一番高いので「自分を正しく把握している」ということなのだろうと考えられる。以上、当初置いた「高モチベーションである人は自己への評価も厳しいのではない

か」という仮定は覆ったが、単位目的群の自己評価の二極化、単位目的以外の群の正しい自己把握等、興味深い結果が得られたと言える。

8. 結論

本研究の結論として、以下の（1）から（4）をあげる。

（1）経験則の数値化

— “化ける” 学生は確実に存在する

本研究の成果としては、第一に考察の部分でもみた、これまで教員達の間で感覚的には言われていた「単位目的で履修をした学生の中には、実習活動を始めた後は熱心に取り組むようになる者が一定層いる」という経験則が、数値結果として出てきたということであろう。

単位目的を履修動機に上げるのは不純である、ボランティア精神にもとると、こうした層がこの社会貢献活動に参加すること自体、好ましくないのではないかという議論は、このプログラムの運営主体の一つである社会貢献活動連絡協議会（各学科から1名ずつの社会貢献活動の担当教員、教務課スタッフ、支援室スタッフで構成される）の中では何度も出ている。また、この社会貢献活動は外部評価委員制度を置いており、各年度ごとに学外の有識者2名を外部評価委員として招聘し、社会貢献活動全般に関するコメントを貰っている。この外部評価委員からも昨年度末の最終報告会後の会議にて「実習先に失礼の無いように、実習に出す前に、もう少し学生をふるいにかけたらかどうか」という意見が出ていた。これに対し、本学の教員サイドからは「しかし、事前にもふるいにかけてしまうと、いわゆる、実習に出すことによって“化ける”学生の存在を無視してしまうことになる」という意見が出ていた。この“化ける”という言葉が示すものが、まさに本研究でみたような、ただ単に単位が欲しいということを履修動機として本活動に臨んだ層が「化けて」熱心に活動に取り組むようになるということである。

こうした形で、この社会貢献活動という教育プログラムの教育効果の一つを数値として目の当りに出来ることは、連絡協議会の教員を含め現場に身を置く者全員にとって、非常に嬉しい結果である。

（2）“意識高い系”への反発

— 中高年層の厳しい意見を表す調査結果

次に、当初の仮定が覆った「モチベーションの高い層ほど自己評価は厳しいというわけではない」という結果についても以下のように再考察を行いたい。昨今の流行語に「意識高い系」という言葉がある。

これはもともと、就職活動に臨む20代前半の若年層のうち、就職活動に対して、或いは将来の仕事というものに対して高い意識を持っている層を指す言葉であった。それが、転じて、就職活動期以外の全ての若年層において、仕事、勉学などについての意識が高い者を指すように変化していったものである。しかし、一方でこの言葉を自分自身に対して使う若者に対し、年長者が「そういうことを自分で言うか?」「口だけで中身がない」といった否定的な意見も多く、中高年層から若年層への厳しい評価という実態を表している言葉でもある。不言実行を善しとする考え方は中高年層には根強く存在し、そうした者にとっては「自分はモチベーションが高い」と明言すること自体が信じられない行いであろう。

このことを本研究と関連づけて考えると、調査結果として出た「高モチベーション層(“意識高い系”)」には、自己評価に甘い者もいる」というという結果は、ある意味、この「意識高い系は実がない者ばかりだ」という中高年層からの厳しい評価という現代社会の様相を、そのまま写し取っているように感じられる。こうした意見を持つ中高年層は「己には常に厳しくあるべき」と考えている場合も多く、自己評価が甘い者は少数存在するだけでも目につくであろうし、「自己評価と他己評価が一致」している層に対してすら納得がいかず、もっと厳しく自己を律すべきであると考えたであろう。このタイプの人物が実習先の学生担当にあると、当然評価は厳しくなり結果、他己評価の得点が減少し、自己評価が「甘い」層の人数が増えるということなのではないだろうか。

(3) 成績処理・単位付与のためのデータベース

また、本調査の調査結果自体、今後の社会貢献活動における成績処理、単位付与における根拠資料となるデータベースになるだろうと考えている。

まず、この社会貢献活動は単位の付与され方が独特で、学生の募集や履修登録、中間期研修会などは社会貢献活動支援室が主体となって行っているが、最終的な成績付けは学科の担当教員(=社会貢献活動連絡協議会のメンバー)が行うという形を取っている。そのため、実は学科の担当教員は、履修登録直後の学生の様子、初回実習に引率した時の学生の様子、中間期研修会での学生の様子など、実習の各地点での学生実態は把握できていないまま、最終成果物(中間期レポートと報告書という2回のレポート、報告会でのプレゼンの様子)のみを頼りに成績付けをしなくてはならなかったという現状がある。

これに対し、学生の自己認識や、その実習開始前・中間期・実習終了後の各時点ごとの意識について、今回の調査のように簡単ながら数値データを取ると

いう体制に移行したことは、より成績根拠となる資料が多くなることに他ならない。

湘南工科大学では、全教科において授業における単位付与の透明性を目指し、数年前よりシラバスへの評価基準の明記を行い、更に今年度からルーブリック評価を導入し学習到達度を示す評価基準を観点と尺度からなる表として示す試みをはじめている。本研究は単位の透明性向上や、ルーブリック作成といった、全学的な試みの一助となるのではないかと考えている。

(4) 成績の統一評価基準の策定へ

一学生のパフォーマンスに正しい評価を下すために

社会貢献活動は教育プログラムとしては学科横断的な取り組みであるのに対し、先に見たように成績付けは学科ごとという体制である。また実習先ごとに異なる評価基準で学生を評価してこられるため厳しい評価をする担当者と甘い評価をする担当者のどちらにあたるかによって「実習先評価」はかなり違ってきてしまう。こうした形で、「社会貢献活動」実は統一的な成績基準を作るのが難しい教科である。そんな中において、少なくとも学生の意識実態や実習先評価について基盤となるデータベースが存在することは、かなり大きな意味を持ってくると考える。

これを踏まえた本研究成果の利用、応用アイデアの一つに、評価がデータベース化さえされていけば、例えば実習先の評価についても支援室側の担当者

(この場合は筆者・東尾)の経験則として「この実習先は評価が厳しい、ここは比較的甘い」という重みづけを何らかの方法で付加することにより、統一基準に近いものへと変換してやるのが可能なのではないだろうか。筆者の前任担当者たちも、これまで、学科の担当教員たちに対し口頭で「この実習先は評価が厳しいのでそこは差し引いて成績をつけてあげてください」といったコメントを伝えていたようではあるが、それを受け取る側(=各学科の担当教員)の側も、どのくらい考慮するのか人によって様々であったらうと思われる。

成績基準は出来れば全学科、全実習先で統一に近いものであることが望ましい。どの学科に所属している学生でも、どの実習先を選択したのだとしても、学生が実習先で行ったパフォーマンス(学生たちの頑張り、あるいは実習成果)に対しては同じ基準で「成績」という最終評価がなされるというのが理想である。実習先評価の厳しさに対する重みづけの方法などについては議論の余地はあるが、どのような形であれ統一基準はあるに越したことはないであろう。

9. 今後の課題と展望

本研究の今後の課題と展望は、大きく分けて以下の4つの方向性で検討していく必要がある。

【課題と展望1】—データの更なる蓄積により精度を高める

本研究では、中間期研修会における活動15時間程度を終えた時点での意識調査を中心に分析、考察してきた。しかし、本来は実習を終えた者が参加する「報告会」においても同様の意識調査を行い、実習開始前、実習中間期、実習終了後の3段階での意識変化をみていくことが望ましい。実は、報告会における意識調査、それも本研究の中間期での意識調査と対をなすような形で、設問形式も同じ5段階評価形式にて回答を要求するアンケート調査を、既に筆者着任と同時に開始している。但し、筆者が着任後、1年半の間にはいまだ4回しか報告会は行われておらず（対して、中間期研修会は既に6・8・11・2月の定常開催のものを6回、その他学生の切実希望により臨時開催したものが4回と既に10回を数えている）、そこでの回収票数はまだデータ分析に足る数に達していない。今後、報告会の数を重ねることにより、票数を集め、分析に回したいと考えている。

【課題と展望2】—相関係数を考慮したより詳しい統計解析

本研究では、単純集計とクロス集計から調査結果を分析、考察を行った。今後は、これをより詳しい統計解析ソフトにかけ、要素同士の相関係数を計算し、その後、数量化分析、因子分析、クラスター分析などにかけていきたい。

現在はクロス集計の組み合わせも、いくつか手動で試み、顕著な結果が見られたものをグラフ化しているという状態である。この組み合わせについても相関係数に基づき、より関連が深そうな二者ないし三者に対し行うことで、より興味深い結果が出てくるのではないかと考えている。

【課題と展望3】—学生の「勤勉さ」を分析に取り入れる

現時点では本調査結果は、アンケートによって得られた「学生の意識」についての数値結果に、実習先からの評価をプラスし、その結果を分析するのみにとどまっているが、今回作成した基盤のデータベースに今後は、こちらが把握可能な限りの学生のさまざまなパフォーマンス（この場合は活動態度という意味）を付加していきたいと考えている。例えば、支援室が既に持っている情報としては、支援室からの各種お知らせメールに対し各学生がきちんと応答返信しているかどうかというものがある。学生に対

しては「各種お知らせに対しメール返信しない者は減点対象となる」と社会貢献活動についての「授業案内」（実習に関する注意事項の書かれた全50頁ほどの冊子）にて明記して警告している。しかし、現状は、そのメール返信態度については、前述の実習先の評価の厳しさ同様に、社会貢献活動支援室の前任者たちが口頭で成績付け担当の各学科の教員に伝えていたという程度であり、どの程度それが成績付けに活かされたかはまた各成績付け担当教員によるという状態である。この状態に対し、メール返信必要な回数はX回のうち、Y回の返信があったという情報、それも期限通りか、期限を過ぎてかなどで得点化したものがあれば、先に上げた統一評価基準での成績付けに際しても役立つであろう。

また、成績基準問題以外にも、このメール返信態度について得点化されたものを「メール返信の勤勉さ得点」といった形でデータ追加することで、今後の分析において面白い分析要素となっていくのではないかと考えている。

そのほか、学生に書かせた志望動機（履修登録時にWEB入力させる「個人登録票2」というもの）に書かせている）や実習先理解を文章で書かせたもの（同「個人登録票2」）の「記入された文字量」を単純に数字として取り扱い、その文字量を「勤勉さ得点」の一部としてカウントしても良いのではないかと考えている。むしろ「文字量」だけが全てではない、中身、質が問題なのだということは当然承知しているが、既に先行研究が「中身」や「質」を文言抽出によって分析していることへの比較の問題からも、単純に「文字量」を対象とした数値研究という方向もあって良いのではないかと考えている。また、その他にも中間期レポートや報告書といった、他の提出書類全てに対して、学生が書いた「文字量」を数値データとしてデータベースに組み入れることを検討している。一般傾向として本学の学生は文章を書くこと、特にまとまった量の文章を書くことが苦手であると言われている。そんな中で、文字量を一定以上書いているということは、対象（今回の場合で言えば、社会貢献活動というもの）に対し真剣に取り組んでいる、すなわち勤勉であることの、一つの要素になるのではないかと考え、新しい研究課題の一つとしてみた。

今回のデータ分析では単位目的か否か、あるいはモチベーション高低についての得点化だけでは説明しきれない現象もみられた。これらについて、「勤勉さ得点」などが加われば、もう少しロジカルな説明、考察ができるのではないかとこの研究展望を持っている。

【課題と展望 4】—社会貢献活動の諸教育効果の数値化と教育プログラムへの還元の模索

本調査研究は、最終的には研究目的で掲げたように、学生の意識変化、態度変化を分析することにより、その結果を社会貢献活動という教育プログラムに還元していくことを目的としている。

しかしながら、現段階で教育効果として顕著な数値観察ができてきているのは「履修動機に単位目的を上げている＝初期段階での低意識者層の学生が、実習開始と共に良い方向へ変化するという」ということであり、すなわち教育効果としては低いレベル層を底上げすることが可能だという事例確認がされただけである。その他の教育効果はないのか、あるとしたらどんな層にどのような形で表れているのかを調べることは、前述の課題 1～3 においても述べてきたことであるが、ここで何某かの教育効果が観察されたとして、それを更により良い形で教育プログラムに還元していくためにはどうしたら良いのか、その観点で研究を進める必要があるであろう。

教育効果が確認されること自体は一つの成果として重要であるが、その還元となると、言葉で言うほど容易くない。およそ教育活動というものに携わる者として、自分の教育ターゲットをどうしていくかは常に重要な課題である。先にあげた低レベル層の底上げという形にのみターゲットを置けば、上位レベルの者の不満を招く。

そして、これは筆者らのみで議論・検討して良い問題ではなく、湘南工科大学における大学教育全体の構想とも連動していかなければならない。本研究結果及び作成したデータベースは、社会貢献活動連絡協議会の教員間で共有していく予定であるが、今後はこのデータベースを拡充・分析を進行させていくと同時に、数値データを前に活発に議論をしていくという場を設けるべきであろう。そして、その議論の中から、より良い方向への新しい教育プログラムを模索していきたい。

10. 謝辞

本研究にご協力頂いた、全ての学生、実習先の担当者の方、連絡協議会の先生方、事務系スタッフの全ての方に、この場を借りて御礼を申し上げたい。

また、中でも特に、社会貢献活動支援室の石黒君子さん、飛田和子さんにはデータ入力に助力を頂いた。ここに深く謝意を表する。

【註】

- 1) 中間期研修会の構成は以下の通りである。①意識調査を兼ねたセルフチェックシートの記入 15 分間②「実習先への正しいメールの書き方講座」30 分間（実際にその場で文例を記入してみるワークショップ）③他己紹介ワークショップ 30 分間（実習先が違う者同士組ませ相互インタビューを行った後相手を「他己紹介」する）④全員の他己紹介を聞いた結果自分と他の実習生との差を認識しそれを記入⑤今回のワークショップを通じて得られたもの 3 つを記入⑥今後の課題 3 つを記入（④～⑥で 15 分間程度）。この流れで中間期研修会を行うことにより、学生はまず自己分析として自分が実習先のことを知っている／知らないなどについて認識をし、その後メールの書き方講座で更に自分のメール態度の問題点を把握し、最後に他の実習生との差分を認識することでより一層の自己認識・自己内省を図ることが出来る。この中間期研修会での新たな試みとしてメール指導等新要素を取り入れたこと、及びその学習効果についての考察は、参考文献 5 に詳しい。
- 2) CAP 制とは単位制度を実質化し、学修すべき授業科目を精選することで十分な学修時間を確保し、授業内容を深く真に身につけることを目的とし、学生が履修科目として前期および後期の各期に登録することができる単位数の上限を定め、各期、年次にわたって適切にバランスよく授業科目を履修させるための制度である。この CAP 制に基づき、湘南工科大学では 2016 年現在、1 つの学期に履修科目として登録することができる履修単位数上限は、基本的には 24 単位に制限されている。但し、2010 年度入学までの学生は 25 単位まで履修することができる。また、2011 年以降に入学した学生は、学期 GPA が 3.50 以上の場合、当該学期の履修単位数上限を 28 単位に、学期 GPA が 3.00～3.50 未満の場合は、履修単位数上限を 26 単位にすることができる。
- 3) 履修動機 1 番目、履修動機 2 番目、事前聞き取り調査のいずれか 1 つでも「単位目的」を回答した者は「単位目的群」と数えている。
- 4) 2014 年に学科名変更が行われたため、2016 年現在、上級生は「コンピュータデザイン学科」下級生は「総合デザイン学科」という形で所属名が変わっているが集計上同学科として扱った。
- 5) この履修動機の「6. その他」において自由記述にて「選択必修科目の関係」という回答をし

た1票を単位目的群に数えるかどうかについては議論の余地があるが、本論では数えないという判断をした。大学の履修システムとして選択必修という制度を強いている中での消極的な理由からの履修ではあるが、この回答者のその他の回答状況及び短期修了希望についての事前の聞き取り状態から、単位が足りなくて困窮しているという理由ではないと判断したためである。

- 6) 実習開始前の実習先への興味と、実習開始後の実習先への興味を回答別に点数化し、その点数差が正の場合「増加」、ゼロの場合「変化なし」、負の場合「減少」とした。点数化は、5段階評価の回答の1. 非常に○○であるを5点、2. まあまあ○○であるを4点、3. (良い)とも(悪い)ともいえないを3点、4. あまり○○でないを2点、5. 全く○○でないを1点という形で与えた。
- 7) 註6)同様に、実習開始前の実習先への理解度と、実習開始後の実習先への理解度を回答別に点数化し、その点数差が正の場合「増加」、ゼロの場合「変化なし」、負の場合「減少」とした。
- 8) 註6)同様に、実習開始前の実習への熱意度と、実習開始後の実習への熱意度を回答別に点数化し、その点数差が正の場合「増加」、ゼロの場合「変化なし」、負の場合「減少」とした。
- 9) 調査票の質問項目B-1、B-2、B-3における回答を、註6)と同様の配点で得点化し、その合計点を「モチベーション得点(活動開始前)」とした。またその後、そのモチベーション得点の最高得点～最低点について上位20%、40%、60%、80%で区切り上から順にモチベーション5、モチベーション4...モチベーション1という形でランク付けた。グラフにおいてはその5～1のランク数値をもって高モチベーション～低モチベーションという形で分類・集計している。
- 10) 註9)と同様に、調査票の質問項目B-4、B-5、B-6における回答を、註6)と同様の配点で得点化し、その合計点を「モチベーション得点(中間期時点)」とした。またその後、そのモチベーション得点の最高得点～最低点について上位20%、40%、60%、80%で区切り上から順にモチベーション5、モチベーション4...モチベーション1という形でランク付けた。グラフにおいてはその5～1のランク数値をもって高モチベーション～低モチベーションという形で分類・集計している。

【参考文献】

1. 田坂さつきほか 「体験による気づきから学びを引き出す「サービスマーケティング」—工科系の特質を生かした社会貢献活動体験型授業科目—」『湘南工科大学紀要』42(1)、2008年
2. 村上拓『社会と工学をつなぐ技術活用力の育成 2008-2010年度 成果報告書』(教育GP報告書)、湘南工科大学、2011年
3. 市山雅美ほか 湘南工科大学『共通科目「社会貢献活動」報告書 2011年 社会に一步踏み出し自分の可能性を広げよう』2012年
4. 東宏乃 「ワークショップでひろがる学びのプロセス—実習科目「社会貢献活動」を事例として—」『湘南工科大学紀要』46(1)、2012年
5. 東尾(金井)淳子 湘南工科大学『共通科目「社会貢献活動」報告書 2015年 社会に一步踏み出し自分の可能性を広げよう』2015年

【附属資料】

社会貢献活動1, 履修登録から実習終了までの流れ

1. 授業ガイダンス 4月上旬・10月下旬

履修説明 ●支援室にて「社会貢献活動1」のポイントを説明し、実習テーマを紹介します
相談受付 ●社会貢献活動専用Web上から履修登録を始める

2. 履修&実習テーマ登録 4月中旬・10月中旬

●最初の履修登録は学内のPCから社会貢献活動専用 Web上から行う

3. 事前研修会 4月中旬・10月中旬

実習テーマ登録 ●社会貢献活動とは? 実習テーマ紹介など
相談受付 ●社会貢献活動専用WEB上で履修登録を終える

4. 実習テーマ別ガイダンス 4月下旬～・10月下旬～

実習テーマ登録 ●スケジュールに従って、希望するテーマ別ガイダンスに参加
相談受付 実習先の詳細・受入れ条件・注意事項等の説明
志望動機の確認 → 実習テーマの確定または変更

5. 実習先初回訪問日連絡 5月中旬・11月上旬

●支援室で実習先と初回訪問日を調整します
●支援室より実習テーマ別に、初回実習日をメールで連絡

6. 実習開始 5月中旬・11月上旬

●初回訪問時、実習先でのオリエンテーション
●2回目以降、実習先との連絡は実習生が各自で行う
●実習時間は「活動記録カード」に記入し、Webにも積算時間を入力する

7. 中間期研修会 6月下旬・8月上旬・11月下旬・2月上旬

●実習を15時間以上行った実習生を対象に実施します
実習前半をふりかえり、実習後半の目標を立てましょう!
●中間期研修会終了後、「中間期レポート」をWebに記入

8. 実習終了 《50時間以上》

●実習終了の見込みが立ったら、実習先と活動時間数を確認
●Webに活動時間を入力し、「報告書」を記入
●「報告書」をプリントして、実習最終日までに実習先に持参
●同時に実習先に「評価書」の記入をお願いする

9. 報告会 前期・後期とも定期試験の翌日 (8月上旬・2月上旬)

●実習の報告をパワーポイントにまとめ、発表する

質問紙原票

Page.1.

中間期研修会WS							
<p>中間期研修会では、あなたの志望動機やこれまでの活動内容などを振り返ると同時に、自分の現状認識し、評価し、そしてそれらを今後の活動に繋げていきます。 なぜ、この科目がボランティア実習といった名称ではなく「社会貢献活動Ⅰ」なのか、その点を意識しながら、自分の中で気づき→改善策→実行という流れを作ってみてください。また、自分が社会に貢献することの意義を、社会にとってのメリットと自分自身のメリットの両面から考えてみてください。</p>							
	学番		学科		学年		氏名
Q A-1	性別		1. 男性		2. 女性		
Q A-2	年齢	()	才				
Q A-3	同居家族の全てに丸をつけ、兄弟姉妹等が複数人いる人はその人数を記入してください。						
	1. 父 2. 母 3. 兄(人) 4. 姉(人) 5. 弟(人) 6. 妹(人) 7. 祖父 8. 祖母						
	9. その他の親戚(続き柄: ex.叔母、伯父、いとこなど)						
	10. その他の同居人(具体的にどんな関係の人か?)						
Q A-4	あなたが、社会貢献活動Ⅰを履修しようと思った一番の理由は何ですか？						
	1. ボランティアに興味があったから						
	2. 人とふれあいたかったから						
	3. 自分の工学系知識を生かした社会貢献を試みたかったから						
	4. 家族や友人・知人など、身近にボランティア経験のある人がいたから						
	5. 単位のため						
	6. その他 ()						
Q A-5	あなたが、社会貢献活動Ⅰを履修しようと思った二番目の理由は何ですか？(上とは違う答えを選んで下さい。)						
	1. ボランティアに興味があったから						
	2. 人とふれあいたかったから						
	3. 自分の工学系知識を生かした社会貢献を試みたかったから						
	4. 家族や友人・知人など、身近にボランティア経験のある人がいたから						
	5. 単位のため						
	6. その他 ()						
Q A-6	家族や友人・知人・交際相手等にボランティア経験がある場合、該当する人全てに丸をつけて下さい。						
	1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉 5. 弟 6. 妹 7. 祖父 8. 祖母						
	9. その他親戚(続き柄: ex.叔母、伯父、いとこなど) 10. 友人・知人 11. 交際相手・配偶者						
Q A-7	あなたが一番尊敬する人は誰ですか？						
	1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉 5. 弟 6. 妹 7. 祖父 8. 祖母						
	9. その他親戚(続き柄: ex.叔母、伯父、いとこなど) 10. 友人・知人 11. 交際相手・配偶者						
	12. その他(ex.高校の恩師・塾の先生・スポーツインストラクター・習い事の先生ほか)						
Q A-8	あなたは、普段、行動するとき誰に一番影響されますか？(誰との関係性によって行動を決めていますか？)						
	1. 父 2. 母 3. 兄 4. 姉 5. 弟 6. 妹 7. 祖父 8. 祖母						
	9. その他親戚(続き柄: ex.叔母、伯父、いとこなど) 10. 友人・知人 11. 交際相手・配偶者						
	12. その他(具体的にどんな関係の人か?)						
Q A-9	あなたが、今回の社会貢献活動Ⅰの実習テーマ(活動先)を選んだ理由は何ですか？						
	【言葉で記入】						
Q A-10	就職活動で、この社会貢献活動の話をする予定ですか？						
	1. YES →どんな風に話す?()						
	2. NO →なぜ話さない?()						

【活動開始前及び開始当時】	
Q B-1	あなたは、当初、今の活動先にどのくらい興味がありましたか？5段階で評価してみてください。 1. たいへん興味があった 2. まあまあ興味があった 3. 興味があったともなかったとも言えない 4. あまり興味はなかった 5. 全然興味はなかった →選択肢の1番、2番といった回答をした人は、どんなところに興味をもったのですか？ ≪言葉で記入≫
	→選択肢の3番、4番、5番といった回答をした人は、どうして興味が持てなかったのですか？ ≪言葉で記入≫
Q B-2	あなたは、当初、今の活動先のことをどのくらい知っていましたか？5段階で評価してみてください。 1. たいへん良く知っていた 2. まあまあ知っていた 3. 良く知っていたともいなかったとも言えない 4. あまり良く知らなかった 5. 全然知らなかった ←団体の独自HPを事前に調べるなど自分でも努力をしてみた ←支援室の壁吊り資料等をじっくりと読んでみたり、教員に質問したりした ←支援室の壁吊り資料をパラパラめくって見た程度 ←授業ガイダンス時に渡された短文の説明を読んだ程度 ←自分では何もせず、教員に勧められるままに決めた場合等
Q B-3	あなたは、活動開始当時、今の活動に対して、どのくらいの意気込みでぞみましたか？5段階で評価してみてください。 (初回訪問の時を思い出してみよう！どんな気持ちで実習先に行きましたか？) 1. 非常に熱意をもっていった 2. まあまあ熱意をもっていった 3. 熱意があったともなかったとも言えない 4. あまり熱意はなかった 5. 全く熱意はなかった
【活動開始から累計15時間経過して】	
Q B-4	あなたは、今の活動先にどのくらい興味を持つようになりましたか？5段階で評価してみてください。 1. たいへん興味がある 2. まあまあ興味がある 3. 興味があるともないとも言えない 4. あまり興味がない 5. 全然興味がない →選択肢の1番、2番といった自己評価(プラス評価)をつけた人は、それは何故だと思えますか？ ≪言葉で記入≫ →選択肢の3番、4番、5番といった自己評価(マイナス評価)をつけた人は、それは何故だと思えますか？ ≪言葉で記入≫
Q B-5	あなたは、今現在、活動先のことをどのくらい知るようになりましたか？5段階で評価してみてください。 1. たいへん良く知っている 2. まあまあ知っている 3. 良く知っているともいえないとも言えない 4. あまり良く知らない 5. 全然知らない →選択肢の1番、2番といった自己評価(プラス評価)をつけた人は、それは何故だと思えますか？ ≪言葉で記入≫ →選択肢の3番、4番、5番といった自己評価(マイナス評価)をつけた人は、それは何故だと思えますか？ ≪言葉で記入≫
Q B-6	あなたは、今現在、活動に対して、どのくらいの意気込みがありますか？5段階で評価してみてください。 1. 非常に熱意がある 2. まあまあ熱意がある 3. 熱意があるともないとも言えない 4. あまり熱意がない 5. 全く熱意がない →選択肢の1番、2番といった自己評価(プラス評価)をつけた人は、それは何故だと思えますか？